

反ナチス抵抗運動と教育史研究の課題

對馬達雄

Zur Erforschung der Bildungsgeschichte über den Widerstand gegen den Nationalsozialismus

Tatsuo TSUSHIMA

はじめに

本稿は研究の厳密な位置づけからすれば、「覚書」としての意味をもつものである。筆者がこれまでの所論⁽¹⁾でその性格や紙幅の制約上、言及しえないでいた論点について述べようとするものだからである。これにはつぎのような意図がある。

その一は、《ナチズムと教育》という研究領域にかかわって新たに浮上した論点を整理するということである。「ドイツ教会闘争」を中心にした反ナチスの抵抗運動は戦後ドイツの歴史学研究が一貫してとりこんできた固有のテーマである。またハンス・ショル、インゲ・ショル兄妹の悲劇的活動にまつわる「白バラ」運動は、戦後ドイツの政治教育・歴史教育の好個の題材となってきた。近年、いわゆる民衆の《日常史》研究が盛んになるなか抵抗運動の対象領域も拡大している。日常生活といういわばミクロ的現象の解明をつうじてナチス統治の現実態、つまり民衆の複雑多様な適応行動から反ナチ斯的行動までも発掘されるからである。もとよりそこには教育的日常の世界もとりこまざるをえない。だが1980年代以降本格化したナチズムにかかわる教育研究では、いまだ抵抗運動じたいを視野に包摂した成果はいぜんとしてきわめて限定されている。しかし《日常史》を承けたドイツ史研究の「学校・家庭」分野への積極的な乗り入れという状況においては、抵抗運動はもはや無視しがたい境界領域となっており、これを教育研究ないし教育史研究の観点からも、整理すべきである。

その二は、このこととかわかって、抵抗運動の思想と活動を媒介させて、ドイツ戦後教育史をより具体的に究明する必要があるということである。これまで、占領下にはじまる公教育の再構築をふくめ、戦後教育の展開過程には解明されるべき問題領域が数多く残されている。たしかにこれには、戦後教育にかんする検討が概説的記

述をのぞけば、いまだ絶対的に少ないという事実が要因としてはたらいっている。じっさい、本格的な戦後研究は1990年以降、ハノーファー大学のM. ハイネマン教授グループによる、英米仏ソ四カ国の占領体制下の高等教育制度にかんする一連の研究⁽²⁾をもってようやく開始されたといっても過言ではない。

だがそれだけではない。何よりもナチス体制・ナチズム教育の崩壊という事実をもって、戦後史との「断絶」を、つまり1945年5月8日を「解放」ないし「新しい出発」⁽³⁾として強調するあまり、思想的底流における「連続」という事象に冷静に着眼する視点がとくに教育研究に欠如してきたことにも、その原因がある。これを教育学思想という側面からみれば、E. クリークやA. ボイムラーなどの周縁の人物をもってナチズム教育とその特徴を説明することで、ナチス体制の12年間を封印しつづけたということになるであろう。その背景には、W. フリットナー、Th. リット、H. ノール、とりわけE. シュプランガーに代表される伝統的な《精神科学派》につらなる教育学者が主流を占めた戦後ドイツ教育学の世界において、彼ら自身の対ナチズム姿勢をも問うこの検討作業が、一種苦痛をともなう問題領域となっていたこともあろう⁽⁴⁾。

だが時代区分としての1945年を「断絶」と「連続」両面からとらえて、はじめてドイツ戦後教育の展開過程も説明できるはずである。

ナチス体制を切り裂いて浮上する抵抗運動の思想と活動を明らかにすることは、この「連続」の視点ともむすびついている。従来の歴史叙述には往々《非ナチ化》《再教育》政策にはじまる戦後教育の路線を直截にワイマル改革期教育への回帰にとどめるといったある種の「歯がゆさ」がつきまとうてきた。だが、抵抗運動を媒介することによって、占領期以降ドイツ公教育の思想的底流は奈辺にあったのかという基本的な問いに立ち向かうこともできる。とくに90年代マールブルク大学のW.

クラフキ教授のもとで、ようやく抵抗問題を包摂するナチズム教育を検討する必要性が強調されるようになったことについても、こうした文脈のなかでとらえるべきであろう。

したがって、反ナチスの抵抗運動を教育史の領域として位置づけ、その研究上の意味を問い、今後の課題を抽出することは、きわめて重要である。このような考えによりながら、以下、抵抗運動はこれまで「教育」の問題領域としてどのように位置づけられ、またその研究状況はどうなっているのか、さらにいかに教育史研究の論点とすべきなのか、これらについて言及しよう。

I 抵抗運動と教育史の叙述

1) 「ドイツ抵抗記念館」の整備拡充と抵抗運動研究のひろがり

ベルリン市、ティア・ガルテンそば官庁街のペンドラー街区の一角に、現在の「ドイツ抵抗記念館」(Gedenkstätte Deutscher Widerstand)につらなる記念の礎石が置かれたのは、1952年7月20日である。それはヒトラー暗殺未遂事件として知られる「7月20日事件」の首謀者たちの遺族の発議によるものであった。1955年同日日にはペンドラー街区は首謀者の一人シュタウフェンベルク大佐の名を冠してシュタウフェンベルク通りと改められ、以後彼の執務室をふくむ建物じたいがベルリン市当局の後援と抵抗運動の生き残りの人びとの運動により、反ナチズム抵抗運動の記念館および見学者向けの学習施設として整備されていく。1968年7月20日、建物二階の三室をあてて、「7月20日事件」の関係資料を中心に常設展示がおこなわれるようになったことを皮切りに、1980年には建物内部と首謀者たちが処刑された中庭が「荣誉庭」として改装され、またその拡充計画も連邦政府によって積極的に後押しされていく。1983年、のちに連邦共和国大統領となるベルリン市長リヒャルト・フォン・ヴァイツェッカーの依頼により、当時パッサウ大学歴史学教授(現ベルリン自由大学歴史学教授)ペーター・シュタインバッハとシュトゥットガルトの造形デザイン教授ハンス・ペーター・ホッフのもとで、ドイツの抵抗運動すべてを網羅した包括的な記録資料の収集とその常設展示の作業がすすめられた。1986年7月20日には新展示の一部公開、1989年7月19日に、ようやくテーマ別26分野、反ナチズムの抵抗運動にかかわった人びとと個人、グループ、組織などの動機、行動、目的にかんする5,000点以上の画像と資料が公開展示され、今日にいたっている⁶⁾。

こうした「ドイツ抵抗記念館」の整備充実が、ナチズムの暴虐を象徴する強制収容所、たとえばそのモデル施設となるミュンヘン郊外「ダッハウ強制収容所」の博物

館としての保存(この種の施設は国内各地に点在する)、および「抵抗記念の日」(=7月20日)の創設とともに、それじたい政治的意図をふくんでいることは明らかである。つまり中央ヨーロッパに位置するドイツ(旧西ドイツ)にとって《過去》を清算し近隣諸国との新たな信頼関係を築こうとするとき、国家的レベルで贖罪とナチズム否定の姿勢を明示する必要があった。同時にまたナチス・ドイツとは異なる「もうひとつのドイツ」の例証として抵抗運動を位置づけドイツ国民への政治教育の場たらしめるねらいもあった。その意味ではヴァイツェッカー元大統領の、かの有名な1985年5月8日の連邦議会における終戦40周年記念演説(いわゆる「荒野の40年」⁶⁾)は、そうした意図にもとづく政治教育の典型例とみることもできる。

この点で、終戦直後《非ナチ化》政策を徹底させたとはいえず、共産主義=KPDのみが反ナチズム抵抗の正当性をにない、その建国じたいをもナチズムの克服の帰結とする(したがってまた独裁制という《過去》との対峙を怠ってきた)旧東ドイツの立場とは、対照をなしてきたといつてよい。

ところで上述のような「抵抗記念館」の展示領域の拡大は、抵抗運動にかかわる歴史学研究的動静と軌を一にしている。抵抗運動研究を紹介整理するには、その文献・資料があまりに膨大であって、とうてい個人の手でなしうところではない。ちなみに1995年の『ナチズム研究文献目録』⁷⁾は1945年から1994年末までの独・英・仏語のナチズム研究文献20,298点を収録しているが、抵抗運動関連の文献は2,959点となっている。くわえて最近6年間のあいだにも多くの研究成果が蓄積されているのである。

ただし、ドイツ人の抵抗運動にかんする最初の学的、包括的な研究書としては、ほぼ一致してハンス・ロートフェルスの『ヒトラーにたいするドイツ人の反対—ひとつの評価—』(Hans Rothfels: Die deutsche Opposition gegen Hitler—Eine Würdigung, Krefeld 1949. 原本はシカゴ大学での講演にもとづく英語版)⁸⁾が挙げられるだろう。改訂、増補を重ね今日もひろく読まれている本書が叙述の対象としているのは、教会闘争、国防軍のクーデター計画、ゲルデラー・グループ、クライザウ・グループ、それに社会主義的労働運動指導者たちの思想と行動である。たしかにこれらが抵抗運動を構成した主たる領域・グループではあることに異論はないように思う。

だが、1968年の学生運動を経たいわゆる《68年世代》の研究者たちのもとで、都市、地方・地域における日常生活レベルでのナチス支配の実態を究明しようという《日常史》研究が大きな潮流となるなかで、「抵抗」概

念にも広がりが見られるようになった。これを端的にあらわすのはデトレフ・ポイケルトの、反ナチス活動の段階的な四類型化である。すなわち(1)「ノンコンフォームイズム」(個々のきまりを侵すが全体を問題にしない「非協力」)(2)「拒否」(当局の指示に反し、たとえばヒトラー・ユーゲントへの加入を拒否する)(3)「抗議」(体制を一般的には拒否しつつ、個々の措置に明確に反対する—たとえば「安楽死作戦」に反対する教会のキャンペーン)(4)「政治的抵抗」(体制全体を拒否し、さらに体制の転覆を準備する)⁽⁹⁾。

こうした学界の動向を承けて抵抗運動の枠組みと領域が拡大され、「抵抗記念館」のテーマ別26分野も構成されている。たとえば、女性の反対行動をも含めた「自由主義・保守主義の立場からの抵抗」、勤労青少年グループを対象にした「青少年の抗議」(「エーデルヴァイス海賊団」など)、その実体が不明であった「ハルナックとシュルツェ＝ボイゼン組織」(「赤い楽団」)、ソ連軍の捕虜士官たちの「国民委員会《自由ドイツ》」、ユダヤ人の抵抗、共産主義者・社会民主主義者たちによる「労働者の抵抗」などである。

こうした構成は網羅的、包括的な「抵抗」を理解するうえではもとより必要ではあるが、狭義の「抵抗」概念たとえば上記の(3)(4)における反ナチス行動の理念的方向性がややもすれば背後にかすむという性格をもあわせて持っている⁽¹⁰⁾。

現在「抵抗記念館」の学術責任者シュタインバッハと同館長ヨハネス・トゥッヘル博士を中心に、抵抗運動にかんする研究書や資料集をはじめ、同館独自の出版活動も活発におこなわれている⁽¹¹⁾。なお両氏によってベルリンの壁崩壊にいたる旧東独国内の「民主化闘争」に焦点づけた「抵抗」研究が新たに上梓されたことは⁽¹²⁾、統一10年を経た旧東独への評価をあらわすという意味でも興味深い。

わが国のばあい、比較的長い研究の歴史をもつ教会闘争関係の著作・訳書をのぞくと、東京大学社会科学研究所編『ファシズム期の国家と社会Ⅷ』(東大出版会 1980年)以降、包括的に政治的抵抗運動を紹介した単著として中井昌夫『ヒトラー時代の抵抗運動』(毎日選書1982年)、山下公子『ヒトラー暗殺計画と抵抗運動』(講談社選書1997年)が挙げられる。とくに後者は上述の研究動向をふまえて研究蓄積をかさねた論著となっている。

では以上のような抵抗運動研究が教育研究とくに教育史の叙述にどのような影響をあたえ、またそれが位置づけられているかをみよう。

2) 教育史のなかの抵抗運動

「ナチズムと教育」のテーマが旧西ドイツにおいて、

ハンス・ヨッヘン・ガム⁽¹³⁾などごく少数の研究者たちの域をこえて、教育研究として本格的にとりくまれるようになったのは1980年代以降である。「ドイツ教育史学会」(Historische Kommission der Deutschen Gesellschaft für Erziehungswissenschaft)による『第三帝国の教育と訓練』(M.Heinemann-Hrsg.: *Erziehung und Schulung im Dritten Reich*, 2 Bde.Stuttgart 1980)の刊行にはじまり、『教育学雑誌』(Zeitschrift für Pädagogik)や『ノイエ・ザムルンク』(Neue Sammlung),『教育学展望』(Pädagogische Rundschau)など著名な学術誌に、ナチズム教育関係の論文が掲載されはじめ、さらにナチズム教育の「特集」が組まれるようになっていく。それは1986年春の「ドイツ教育学会」ハイデルベルク大会でも研究討議のテーマとされている。ただし、こうしたナチズム教育への着目には、たとえばウルリッヒ・ヘルマンやユルゲン・エルカースらの研究⁽¹⁴⁾が示すように、「改革教育」の延長線上での問題関心つまり多様な教育改造思想の束からなる「改革教育」の帰趨如何という問題関心がみてとれる。ディーター・ランゲヴィーシェ(テュービンゲン大学)とハインツ・エルマー・テノールト(フランクフルト大学)の共同編集による『ドイツ教育史ハンドブック—第5巻 1918-1945』(Dieter Langewiesche / Heinz-Elmar Tenorth-Hrsg.: *Handbuch der deutschen Bildungsgeschichte*, Bd. V 1918-1945. München 1989)には、分野ごとの研究概説と詳細な文献一覧が付されているから、ここではその具体的、個別的な内容を再述することは避けよう。ただ旧来の教育学思想・学校教育・教育政策の領域だけでなく、「家族」「青年」「メディア」の領域での研究概説が加わり、またヒトラー・ユーゲントと連動した「社会教育」問題がポイケルトによって執筆担当されていることに、『日常史』研究のインパクトがみられる。

しかし、この『ハンドブック』ではいまだ抵抗運動をそれ自体として取りあげるにはいたっていない。わずかに抵抗者としてのアドルフ・ライヒヴァインの名が二度ごく紹介的に記されるにとどまっている。

一方、上記のテーマの扱いを同時期の旧東ドイツのいわば官定の教育史書と目されるカール・ハインツ・ギュンターを責任編集者とする『教育史(第14版)』(Karl-Heinz Günther u.a.-Hrsg.: *Geschichte der Erziehung*, 1987)についてみると、初版(1956年)以来、一貫してヴィルヘルム・ピーク(旧東ドイツ初代大統領)をはじめとするKPD指導下の反ファシズム勢力の闘争、とくにKPD 党員テオドール・ノイバウアー、同教師マルチン・シュヴァンテス、それに「社会民主主義者」ライヒヴァインらの反ナチス闘争が、建国理念の正当化の見地から叙述されている。またギュンターほか編纂の『教

育史資料（第8版）』（Quellen zur Geschichte der Erziehung, 1978）のばあい、ピークをはじめ KPD 党員教師の「言説」や「国民委員会《自由ドイツ》」の「反ファシズムの教育宣言」が収録されている。したがって抵抗運動を教育史の叙述にふくめ、それに一定の地歩をあたえたのは旧東ドイツにおいてであった。

90年代以降、統一ドイツにおいてようやく教育史の一領域として抵抗運動が加えられるようになった。たとえば「文化史資料集」の第22巻として刊行された『国家と社会のなかの学校—19~20世紀のドイツ学校史資料—』（B.Michael / H.H.Scheppe: Die Schule in Staat und Gesellschaft. Dokumente zur deutschen Schulgeschichte im 19. und 20. Jahrhundert, Göttingen 1993）は、「第6章 ナチス体制下の国家・社会・学校」の「第3節 抵抗運動の文書」として「1944年7月20日の蜂起」と「クライザウ・グループの計画」を、ナチズムにたいする「良心の蜂起」として収録している。管見によれば、本書は通史的見地からの資料編纂としては最初のものである。こうした近年の研究動向を、「1945年から現代まで」を対象にしたクリストフ・フュール、カール・ルートヴィヒ・フルク共同編集『ドイツ教育史ハンドブック—第6巻』（Christoph Führ / Carl-Ludwig Furck-Hrsg.: Handbuch der deutschen Bildungsgeschichte, Bd. VI, 1945 bis zur Gegenwart, München 1998）についてみると、第一分冊「ドイツ連邦共和国篇」によろしく「第三帝国における教会と抵抗運動」の項目が1ページ余り割かれ、「教会闘争」の存在が解説されている。しかしそれと戦後学校教育との連関ははまだ触れられていない。

むしろヒトラー・ユーゲントに焦点をあて、それに「反抗」（広義において「抵抗」）する青少年の問題とくに「エーデルヴァイス海賊団」や「スウィング」など、前述の日常史の研究を承けた、ナチズム教育の実態にかんする研究成果がわが国でもみられることが、注目されよう。たとえば竹中輝雄『エーデルヴァイス海賊団—ナチズム下の反抗少年グループ』（勁草書房 1998年）⁽¹⁵⁾、原田一美『ナチ独裁下の子どもたち—ヒトラー・ユーゲント体制』（講談社選書 1999年）などである。しかし、これらの著作はナチズム教育の実態究明という叙述の性格上、抵抗運動の「理念的方向性」までを見据えたものとはなっていない。

したがって、戦後教育に架橋する《ナチズム・抵抗運動・教育》というテーマは、現代教育史の領域では、いまだ研究蓄積の乏しい周縁的な領域である。以下に述べるように、むしろこのテーマは基本的に個人研究、とりわけ「ライヒヴァイン研究」という枠内にとどまっているといつてよいであろう。

II 抵抗運動のなかのライヒヴァインと「クライザウ・グループ」について

1) ライヒヴァイン研究の意味

反ナチスの政治的抵抗者としてアドルフ・ライヒヴァイン（1898—1944）は、抵抗運動研究のごく初期の時点から周知の存在であり、「抵抗記念館」の展示でも特筆すべき対象となっている。彼が1933年ナチスによりハレ教育大学教授の地位を追われ、7年間ベルリン近傍の街村ティーフェンゼーの学校教師として活動した校舎の外壁には、彼の事績を顕彰するプレートが据えられ、近くを交叉する道路にも「ライヒヴァイン通り」という名称が冠されている。またティーフェンゼーでの彼の実践記録『創作する生徒たち（Schaffendes Schulvolk）』（1937年）は、いまなお教育系大学生が接すべき歴史的文献として位置づけられている。

だが1970年代までは、その全体的な活動と思想はジェームズ・ヘンダーソンの『ライヒヴァイン伝』（James L. Henderson: Adolf Reichwein. Eine politisch-pädagogische Biographie, Stuttgart 1958）によって知るほかになく、ほとんど未解明のままであった。フーバーとクレプスを中心に研究者14名による共同研究『アドルフ・ライヒヴァイン 1898-1944』（W.Huber / A.Krebs-Hrsg.: Adolf Reichwein 1898-1944, Paderborn 1981）は、その全体像にせまる最初の本格的な研究成果である。当然のことながら、従来日本では無名の存在であったが、「世界新教育運動選書シリーズ」の一巻としてライヒヴァイン、クラット／長尾十三二・W. ウィルヘルム訳『自己形成の教育』（明治図書1989年）が刊行され、ようやくその存在が紹介されるようになった。

その後、マールブルク大学に博士論文として提出されたアムルンクの大著『アドルフ・ライヒヴァイン 1898-1944 —政治的教育家・民俗学者・反ナチス抵抗者の生涯—』（Ulrich Amlung: Adolf Reichwein 1898-1944. Ein Lebensbild des politischen Pädagogen, Volkskündlers und Widerstandskämpfers, 2 Bde. Frankfurt a.M. 1991）が上梓され、ときあたかも《歴史家論争》の時期にあったこともあり、大きな反響を呼んだ⁽¹⁶⁾。そうしたなか教育学界でも彼の思想と行動に関心がよせられ、現在まで少なからぬ論文・著作が出されている。それは一つにはライヒヴァインの未亡人ローゼマリーや長男ローラントを中心にした、ライヒヴァインにかんする回想録や書簡・資料集であり、もう一つはワイマル期の教育運動・改革者としての活動、ティーフェンゼー農村学校の教育実践、さらにクライザウ・グループでの反ナチスの政治的抵抗者としての思想と活動に焦点づける研究からなる⁽¹⁷⁾。

筆者のこれまでの論考⁽¹⁸⁾およびアムルンクの著作にかんする訳業は、こうした研究動向と軌を一にしておこなわれてきたものである。

以上のようなライヒヴァイン研究を抵抗運動とのかかわりで意味づけるとすれば、彼の思想と行動、とくにティーフェンゼー農村学校をナチス体制のなかで「教育の孤島」たらしめた実践とその思想（「教育的抵抗」）が、ナチズム教育に吸収されえない「改革教育」理念の、戦後教育に継承すべき遺産となっていること、多様な思想潮流からなる政治的抵抗運動を貫徹する固有の「人間形成論」いわば「抵抗の教育学」を表現しているということである。そこには、テオドア・アドルノが『アウシュヴィッツ以後の教育（Erziehung nach Auschwitz）』（1966年）において提起した「アウシュヴィッツを二度とくり返してはならないという教育の至上命題」―「自律への教育」要求にたいする明確な応答がある。またここに抵抗運動研究に占めるライヒヴァインの独自の存在意義がある。

このことはさらに、彼が主要メンバーともなったクライザウ・グループをいかにとらえるかという問題にも連動している。

2) 「クライザウ・グループ」の教育計画について

法律家のモルトケ、ヨルク両者を中心に主要メンバー20名からなるクライザウ・グループが抵抗運動研究において終始注目を集めてきたことは、上記のロートフェルスの叙述にも明らかである。じっさい、グループ・メンバーが終戦直後からその存在と活動の内容を秘匿資料（「クライザウ文書」）をふくめて公表し⁽¹⁹⁾、またモルトケの獄中書簡『最後の書簡』（Helmuth James Graf von Moltke 1907-1945. Letzte Briefe aus dem Gefängnis Tegel, Berlin 1951）が抵抗運動の「良心」を如実に示す文書として人口に膾炙し、クライザウの存在をクローズアップさせたこと、さらにペーターズ、ガブレンツ、シュテルツァー、ルカシェク、ゲルステンマイアーなどの生き残りメンバーが戦後ドイツの学界や政界で幅広く活躍したこと⁽²⁰⁾、こうした経緯もあってクライザウは、政治的抵抗グループの代表的存在となっている。じっさい、「抵抗記念館」の第15展示室「クライザウ・グループ」とそれにつらなる展示室は、資料的整備がすすんだこともあり、その全体像を知るうえでもっとも充実した内容となっている。

ところで、クライザウについて単なる活動紹介の域をこえた、画期的な研究成果と衆目一致する著作に、ヘル・ファン・ローン『反ナチス抵抗の新秩序―ドイツ抵抗運動のなかのクライザウ・グループ』（Ger van Roon: Neuordnung im Widerstand — Der Kreisauer Kreis innerhalb der deutschen Widerstandsbewegung,

München 1967）がある。本書はグループの「思想的源泉」「メンバー構成」（ここではまだガブレンツは除外されている）「他のグループとの連携をふくむ活動」「グループと諸外国とのコンタクト」「グループの構想」それに大部の「資料集」からなり、本書の刊行によって、クライザウ研究が大きく前進する契機ともなった。ここでローン以後の個々の研究を紹介論評することは避け、とくに資料について挙げよう。それは、1966年ガブレンツの秘匿文書からライヒヴァイン起草の討議資料『教育の思想』およびモルトケの『補遺』などが発見されたこと⁽²¹⁾、1971年メンバーの一員イエズス会修道士ロタル・ケーニヒがナチス追及をのがれ秘匿していた彼の遺品からクライザウの「討議文書」が発見され、それが1987年にブライシュタインの厳密な校訂にもとづく『クライザウ・グループ文書（R. Bleistein-Hrsg.: Dossier — Kreisauer Kreis. Dokumente aus dem Widerstand gegen den Nationalsozialismus, Frankfurt a.M. 1987）』として公刊されたことである。この資料集は、グループが1942年から43年にかけてモルトケの所領地シュレーゼンのクライザウ（グループ名の由来）で開催した3回の全体会議の討議資料をふくむ貴重な文書となっている。ライヒヴァイン研究において明らかにされているクライザウでの活動資料やその他のメンバーにかんする資料が刊行されていることと相まって、今後さらにクライザウ・グループ研究の拡大と深化が期待できる。

そこで、クライザウにかんする研究の意味について述べることにしよう。ライヒヴァインがグループの戦後教育計画を主導したというライヒヴァイン研究の一環としての意義は、ここではさておく。まずこのグループが着目されるのは、左右両翼の政治的抵抗運動グループの「大連合」をめざした「市民的な」抵抗グループの代表的存在であり、明確にナチズムへの「対案」を提示したことにある。そこでの思考の系統性と密度は他の抵抗グループに類例がない。「対案」はドイツ再生にむけた、新国家体制、新経済秩序、外交政策、国際経済秩序、戦争犯罪の処罰等々の包括的な構想であるが、その前提にはドイツ国民の「精神的刷新」（モルトケのいう「精神の覚醒」）があり、必然的に「人間形成」のテーマへの取り組みがある。そこにはナチス体制下での学校と家庭の崩壊、より根本的には大衆化社会における「人間存在」への危機意識と、「キリスト教的・ヨーロッパ的文化伝統」への回帰・キリスト教理念の復興という基本的な課題意識が貫流している。

この「世俗化」にたいする問いなおしは、ナチスの苛烈な宗教弾圧政策と政治的抵抗運動のなかから浮上した。「キリスト教の復権」は単に教会闘争のテーマであったのではない。19世紀近代の潮流の延長上にとらえられた

政教分離は、市民的レベルにおいて、しかも新たな視点をもって吟味されたということである。従来、教育研究においてこの論点はまったく検討の枠外にあったといっても過言ではない。

戦後ドイツの公教育体制におけるキリスト教の位置づけいかんも、以上のような文脈からとらえる必要がある。そこで、以下に抵抗運動と戦後教育との「架橋」について述べる。

Ⅲ 抵抗運動と戦後教育の「架橋」について

ドイツ近現代史のなかで《宗教と教育》が主要な問題領域の一つでありつづけたことは、あえて指摘するまでもない。だが上述のように、それが根底から問いなおされたのは、いわゆる「政治的宗教」として精神生活をふくむ人間の全生活領域を手中にしようとするナチズムと、社会意識を規定していたキリスト教との相克という事態においてである。公共的生活、なかんづく青少年の学校教育のありように始まった国家によるキリスト教の強圧的な排除が、人間生活のなかの宗教的信仰の危機として、問題の重大さを浮き出させたのである。それは、新旧両宗派教会の不断の抵抗と、戦時下、民衆への精力的な福音宣教・牧会による教会の役割の増大という事実によって、より鮮明なものとなった。

ナチスの宗教排除政策はドイツ社会の根強いキリスト教的伝統のもとで貫徹できなかつたばかりか、むしろ教育の「世俗化」そのものへの疑問を招いたのである。それは市民的な政治的抵抗者にほぼ共通している。彼らがナチス支配からの国民の脱却＝「覚醒」という運動目標を、キリスト教的観点から構築したのもそのためである。クライザウ・グループの生き残りメンバーが終戦直後、こぞってキリスト教民主同盟（CDU）の結成に参画したのは、その具体的な行動表現である。

かつて、教育史家フリードリヒ・パウレンはフランスの「政教分離法」（1905年）に触発されて、翌年『ドイツ教育制度発達史』（Das deutsche Bildungswesen in seiner geschichtlichen Entwicklung, Berlin 1906）を著し、教育制度の「世俗化」を、宗教教育・学校形態・学校監督の「脱教会化」の観点から叙述し、この趨勢を不可避としながらも、フランスと対照的な、学校の宗教的基礎の存続を予想している。この予想は、以後ワイマル期改革において妥当しただけでなく、戦後西ドイツにおいても《基本法》体制のなかで現実のものとなった。

この現代史に特異な、国家のキリスト教的基礎の宣明、キリスト教教育の復権というドイツ戦後史の出発には、ナチズムの洗礼を通じて再認識された宗教的価値の保全と「キリスト教的伝統」の通底という事実がある。反ナ

チス抵抗運動はこうした歴史過程を究明しようとするさいの重要な媒介項としての役割をになっている。また《宗教・教育・学校》というテーマも、こうした媒介項によって新たな意味づけが可能であるし、またそうする必要があると思う。

別言するならば、それは公立学校の宗教教育と学校自体の宗教的基礎の後退現象に端的に表現される「世俗化」の過程を、多元的社会における教育改革の「自明」の方向性として表層のレベルで理解してきたことにたいして、再考を促すものである。

またこのようにとらえるならば、ドイツ戦後教育史は、いぜん《過去》を清算しえないでいるわれわれ自身の現代史をめぐる歴史教育と政治教育にとって好個の題材を提供するだけでなく、歴史認識そのものの構築にも新たな手がかりを与えるはずである。

〈注〉

(1) 拙稿「反ナチ抵抗者の教育実践と戦後改革構想—ライヒヴァインとクライザウ・グループ—」（日本教育学会『教育学研究』第63巻第1号 1996年3月所収）同「反ナチ抵抗運動とキリスト教的教育の復権」（教育史学会紀要『日本の教育史学』第40集1997年10月所収）同「反ナチス抵抗運動とキリスト教教育の復権—「クライザウ計画」を中心に—」（未刊）

(2) Manfred Heinemann(Hrsg.): *Hochschuloffiziere und Wiederaufbau des Hochschulwesens in Westdeutschland 1945-1952*. Teil 1,2,3. Hildesheim 1990-1991. Ders.: *Vom Studium generale zur Hochschulreform. Die "Oberaudorfer Gespräche" als Forum gewerkschaftlicher Hochschulpolitik 1950-1968*, Berlin 1996. Ders.: *Süddeutsche Hochschulkonferenzen 1945-1948*, Berlin 1997. Ders.: *Hochschuloffiziere und Wiederaufbau des Hochschulwesens in Deutschland — Die sowjetische Besatzungszone*, Berlin 1997. その他。

(3) この点にかんしては、とくにユルゲン・コッカ「連続と非連続 - 日本と比較したドイツ史における1945年の断絶」（『レヴァイアサン』臨時増刊号、木鐸社 1990年、21頁以下参照）。

(4) 最近刊行された E. マテスの教授資格取得論文は、この問題に正面から取り組んだ注目すべき労作である。Eva Matthes: *Geisteswissenschaftliche pädagogik nach der NS-Zeit — Politische und pädagogische Verarbeitungsversuche*, Bad Heilbrunn 1998.

(5) ドイツ抵抗記念館発行の資料集「1 Einführung」による。同様の記述として山下公子『ヒトラー暗殺計画と抵抗運動』（講談社1997年）254-255頁。

(6) 邦訳書として永井清彦『荒れ野の40年』（岩波書店 1986

年)。

(7) Michael Ruck: *Bibliographie zum Nationalsozialismus*, Köln 1995.

(8) 1958年の改訂版の邦訳書として片岡敬治・平井友義『第三帝国への抵抗』(弘文堂 1963年)。

(9) Detlev Peukert: Alltag unterm Nationalsozialismus. in, U. Hermann (hrsg.): *Die Formung des Volksgenossen*, Weinheim 1985. S.54-55.

(10) とくにこの点については、宮田光雄『ナチ・ドイツの精神構造』(岩波書店 1991年), 13-14頁。

(11) 主要なものとして、とくに以下のものを挙げておく。
J.Schmädeke / P. Steinbach (Hrsg.): *Der Widerstand gegen Nationalsozialismus — Die deutsche Gesellschaft und der Widerstand gegen Hitler*, München 1985. P. Steinbach / J. Tuchel (Hrsg.): *Widerstand gegen den Nationalsozialismus*, Berlin 1994. Ders.: *Widerstand in Deutschland 1933-1945 — Ein historisches Lesebuch*, München 1997. (邦訳 田村他『ドイツにおけるナチスへの抵抗1933-1945』現代書館 1998年)。また抵抗記念館叢書のうちクライザウ・グループにかかわる人物については Clarita von Trott zu Solz: *Adam von Trott zu Solz — Eine Lebensbeschreibung*, 1994.

(12) P. Steinbach / J. Tuchel (Hrsg.): *Widerstand und Opposition in der DDR*, Köln 1999.

(13) たとえば Hans-Jochen Gamm: *Führung und Verführung*, München 1964. Ders.: *Das Elend der spätbürgerlichen Pädagogik*, München 1972.

(14) U. Hermann / J. Oelkers (Hrsg.): *Pädagogik und Nationalsozialismus*, Weinheim 1989. S.9ff.

(15) 本書にかんする筆者の評価については、『教育学研究』65-4 (1998年12月)「図書紹介」参照。

(16) 本書は若干の改訂をほどこし、1999年に新装版全一巻として刊行されている。さらに豊富な写真を付したダイジェスト版として、U. Amlung: *“... in der Entscheidung gibt es keine Umwege”*. Berlin 1994がある。1991年版の日本版として、対馬達雄・佐藤史浩訳『反ナチ・抵抗の教育者—ライヒヴァイン 1898-1944—』(昭和堂1996年)。なお本書の意義等については「訳者あとがき」参照。

(17) ライヒヴァインにかんする1980年代末までの文献目録は、上記のアムルンクの『ライヒヴァイン伝』に詳細に記載されている。1990年代における主要な単書として、ライヒヴァインの未亡人による回想記 (Rosemarie Reichwein: *“Die Jahre mit Adolf Reichwein prägten mein Leben” — Ein Buch der*

Erinnerung. München 1999.) のほか書簡・資料集として G.C.Pallat / R.Reichwein / L.Kunz-Hrsg.: *Adolf Reichwein: Pädagoge und Widerstandskämpfer. Ein Lebensbild in Briefen und Dokumenten (1914-1944)*, München 1999がある。ティーフェンゼーの教育実践にかんしては、W.W.Klafki u.a. (Hrsg.): *Adolf Reichwein — Schaffendes Schulvolk / Film in der Schule. Die Tiefenseer Schulschriften. Kommentierte Neuauflage*, Weinheim 1993. U.Amlung u.a. (Hrsg.): *“Die alte Schule überwinden” — Reformpädagogische Versuchsschulen zwischen Kaiserreich und Nationalsozialismus*, Frankfurt / M. 1993. またイェナ大学でのライヒヴァイン生誕100年記念展示・コロキウムにもとづく論文集 M.Friedenthal-Haase (Hrsg.): *Adolf Reichwein — Widerstands-kämpfer und Pädagoge*, Erlangen 1999は、彼の成人教育、学校教育、抵抗運動にかんする高水準の論考からなる。

(18) 対馬達雄・佐藤史浩「C. H. ベッカーと A. ライヒヴァイン—教育アカデミーの創設構想とその継受をめぐって—」(『教育学研究』57-1, 1990年3月), 対馬達雄「ナチス体制下の教育的抵抗—ライヒヴァインとティーフェンゼー農村学校—」(『思想』第883号, 1993年11月)

(19) Hans Peters: *Zwischen Gestern und Morgen*, Berlin 1946. Theodor Steltzer: *Von deutscher Politik — Dokumente, Aufsätze und Vorträge*, Frankfurt a.M. 1949.

(20) ベータースは1949年までフンボルト大学の政治学教授・学部長をしたのち、ケルン大学の学長となっている。ガブレンツは1953年からベルリン大学の政治学教授になり、シュテルツァーは1945年末からイギリス占領地区のシュレスヴィヒ・ホルスタイン州の行政責任者(首相)に、ルカシェクは1949年第一次アデナウアー内閣の難民省の大臣に就任している。ゲルステンマイアーは1954年から連邦議会議長、60年代には連邦首相候補、連邦大統領候補になっている。彼らはともにベルリンでの「キリスト教民主同盟」(CDU)の創設に参画している。Vgl. W.E. Winterhager: *Der Kreisauer Kreis-Porträt. Eine Widerstandsgruppe*, Berlin 1985. S.201ff.

(21) 『教育の思想』はこれまでタイプ原稿のコピーでしか閲覧できなかったが、1999年によくライヒヴァインの資料集に序文を除いて収録された。Vgl. G.C.Pallat / R.Reichwein / L.Kunz (Hrsg.): *a.a.O.*, S.396-400.

(2000年12月14日受理)